歴史館だより

題字　最上家第47代当主　最上公義氏

- 旧鶴岡城本丸御殿障壁画「竹林図」について
- 保科正之公と浄光寺
- 最上義光歴史館サポーター「義光会だより」No. 1
- 研究余滴　「地震と最上家」

No.18
2011年3月発行
最上義光歴史館

旧鶴岡城本丸御殿障壁画「竹林図」について

宮島新一

旧鶴岡城本丸御殿の障壁画とされる九幅はいずれも鶴岡市の文化財に指定されており、昭和五十一年に刊行された『目で見る鶴岡百年　付酒田』上巻に全ての図が掲載されている。これらに加えて新たに、克念社（風間家丙申堂）の金地著色「竹林図」一面が同じく鶴岡城本丸御殿の障壁画として紹介され、平成九年十月二十六日に初めて公開された。

「竹林図」は一見して、桃山時代の作品とわかる特色を備えているにもかかわらず、他の図と同じく鶴岡藩の御抱え絵師三村常和筆として紹介された。寸法も縦二・七メートル、横五・四メートルと巨大で、全国的にも遺例の少ない貴重な作品である。また、普通には「竹虎図」や「竹鶴図」として描かれるにもかかわらず、竹林だけで構成されている点も他に例を見ない。

報道に際して三村常和筆とされたのは次のような文献の存在による。旧庄内藩士、黒谷時敏が明治十一年に著わした『くだくだ草』（史料叢書第七編・昭和三年）に、玄関に接続する建物に「竹の間とて殿の御在国の折は御徒一人づつ出番する所」、「此西の間を桜の間と云いて御広間なり」、「其の西の間を桐の間と云い又金鶏の間とも云う」「其の西の間を松の間と云う御番頭の詰所なり、茲には北へ折曲がりて上段の間もありけり」と部屋の名前を列挙して、「竹の間より此所まで皆金張付けに、常和と云う画工が其物を間毎に書きたるによりてかくは名づけられたる也」と記されている。

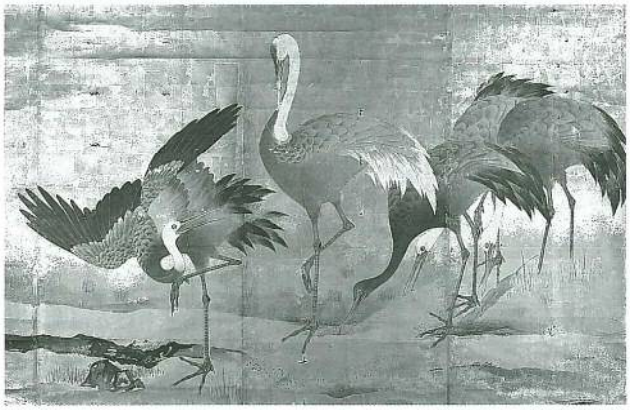
これらの間取りや部屋の名前が正しいことは鶴岡市郷土資料館の「出羽国庄内鶴岡城住居絵図」によって確認できる。黒谷時敏は金地の図はすべて三村常和筆としているが、幕末期には確かにそう伝えられていたのだろう。三村常和（一六七八没）は名前からすると狩野常信（一六三六～一七一三）から一字を戴いたようである。常信は慶安三年（一六五〇）に父、尚信が没した後、わずか十五歳で家督を継いでいる。その翌年に常和は酒井家に抱えられ、承応二年（一六五三）に酒井忠当に従って庄内に下っている。

画風からすると、本丸御殿障壁画とされているうちで、常和が描いたと見なされるのは致道博物館と木村家に分蔵されている「群鶴図」だけである。田圃に下りたった鶴といういかにも江戸狩野らしい主題と画風であり、致道博物館に襖三面分が一幅、木村家には四面分二幅が残されている。『くだくだ草』に白木書院に関して「西の壁際には鶴の群居たるを書きし金屏風立て置かる」とあるのはこの図のことらしく、諸士のお目見えにあたって外されていた襖絵を屏風と見まちがえたのかもしれない。

明治期の証言だけでは心許ないので、もう少し古い記録を探ってみよう。『雞肋編』巻十九に、「承応元年より御普請所覚書」という本丸御殿の建築記録がある。そこには「承応二年御城御本丸御居間、御同所御寝間、黒木白木書院、御奥御室三つ表台所、御金蔵、御城御長局、御鷹部屋夜居座敷建」、「明暦二年御本丸御小座敷建」などと見える。これらの建築にあわせて三村常和が抱えられ、鶴岡に下向したことがわかる。

画題からすると風間家の「竹林図」は「御広間」の玄関に接続する「竹の間」の大床に張り付けられていた図だったと考えられる。図の横幅はほぼ三間分に相当し、図面の間数と一致する。問題は明暦元年（一六五五）に建てられたという「御広間」が新築だったのかということである。普通、古い障壁画を新たな建物に再利用した場合には画面が切り取られたり接続に乱れが生ずるものだが、「竹林図」にはそういった形跡はまったく見られない。建物との一体性が極めて強いのである。白木書院など城主の居住空間にあたる多数の建築物が建てられた二年後に「御広間」一棟だけが別に建てられていることを考えると、まったくの新築ではなかった可能性が考えられる。もし、そうだとするといつの建物なのだろうか。

鶴岡藩士の志田則富が著わした、宝暦八年（一七五八）の序をもつ『鶴ヶ岡昔雑談』（庄内文庫・大正二年刊）には「（御入部の節）御本丸ばかりにて粗末なる萱葺、微々なる御殿ありて一向御手狭なる事なりし、（略）御花畑と申所へ急に仮御殿と号して御普請、（略）御本丸御殿御造営仰せ付けられ



「群鶴図」　致道博物館

「竹林図」 克念社

し」とある。同書に引用される「御鷹匠山田氏雑談」によれば「高畑の御仮御殿には成覚院様御入国以来四五年も御座遊ばされ御本丸御造立卒りて御移徒」とあるので、寛永三、四年（一六一七・一八）には本丸御殿の増築が終わっていたようだ。普通に考えれば、この時の建物ということになるが、「竹林図」にしても、もとは桐間の襖絵の一部だったと考えられる致道博物館の「桐図」や「躑躅図」にしても、画風からすると寛永期以前の作であり、この時に描かれたとは考えられない。

実は、入国当時には貧弱な建物しかなかったとする志田則富の記事には誇張がある。元和八年（一六二二）に酒井家が最上家より酒田の亀ヶ崎城を受け取った時には豊富な障壁画があったことが記録に残されている。

『大泉紀年』の元和八年九月十日の条に所載される「亀崎本丸土蔵帳」によって、書院の「桃之間・墨絵之間・金之間・鷹之間・すすきの間・はきの間」の腰障子および、上広間の「絵かき障子拾貳枚」を引き継いだことがわかる。

さらに、岡田悟・飯淵康一・永井康雄氏による「藩政期における酒田の亀ヶ崎城とその本丸について」（日本建築学会計画系論文集六〇五号・二〇〇六年七月）によれば、この時の亀ヶ崎城本丸御殿は七室からなる書院、七十八帖からなる広間、四十帖の上広間、さらに奥を中心に浴室や台所などからなっていたことが明らかにされている。亀ヶ崎城は慶長六年に最上家家臣の志村光安が城主となり、同十四年に同人が没したあと光惟が継いだものの、十九年に鶴岡にて一栗兵部に暗殺されたため、以後は最上家の直轄地となったものである。

一方、鶴岡城は当初から最上家の直轄地であり、連歌師乗阿による慶長八年（一六〇三）の『最上下向道記』には「（六月）羽州庄内今あらため鶴岡といふにいたれは御城の普請の奉行衆とて」とあって、最上義光の命によって普請が進められていた。義光は晩年には庄内地域の開発経営に力を注いでおり、慶長九年（一六〇四）閏八月二日の北館大学宛最上義光書状には「鶴岡へもおりおりまかりいて」とある。この時までには御殿は完成していたようで、城代として新関因幡守久正が置かれていた。鶴岡城の引き渡しの際には兵具類の記録しかないが、数は亀ヶ崎城を上回っている。慶長十七年五月九日付北館大学宛書状には「つるおか諸道具風すかし候はんために此もの共相下し候」とある。御殿についても亀ヶ崎城の規模を下回ることはなかったであろう。

「竹林図」を最上義光が慶長九年に建てた鶴岡城御殿の障壁画としても年代に問題はない。慶長十五年に完成した仙台城本丸御殿障壁画の一部である二曲一隻の「竹図」（仙台市博物館）と比較するとより柔軟な趣があり、いっそう古風である。また同じく慶長十五

左「躑躅図」 右「桐図」 致道博物館

年頃に創建された熊本城本丸御殿が近年再建されたが、その根拠となった「御城内御絵図」（一七六九）の大広間の間取りと画題は鶴岡城の「御広間」とよく似ている。式台の間につづいて「鶴の間」があるところが違うが、奥へ「梅の間、桜の間、桐の間、若松の間」と並んでいるのは、梅が竹に入れ替っているだけでまったく同じである。

ただし、厄介な問題がもう一つある。「竹林図」には二重に金雲が描かれているのに対して、「桐図」や「躑躅図」は総金地で雲が描かれていない。この二つは別の絵師の手になるもので、制作年代についても若干の差を考えなくてはならない。両者の来歴については異なるルートを考える必要がある。

そこで再び『鶴ヶ岡昔雑談』にもどると、「小寺信正聞書の内に云う」として「京極家の御家取壊の時御書院の張出御取寄せ成らせ候て荘内へ御差下仰せ付けられ、今の御城金張付絵の間は皆彼京極家の張付を御取寄御張らせ遊され候由」という記事が見出される。小寺信正によれば、金張付け絵は宮津京極家の絶家に際して江戸屋敷を拝領した時に庄内に取寄せたというのである。しかしながら、『徳川実紀』の寛文六年（一六六六）五月七日には「京極丹後守が自邸は松平遠江守忠倶に、麻布別墅は松平対馬守忠豊にあづけらる」とあってその信憑性が疑われる。だが、『雞肋編』巻百四十二には「小嶋氏筆記」として「寛文七年末六月十五日（養正公御代也）大手先御屋敷差上られ、大名小路京極丹後守様上り屋敷御拝領、但是八御装束屋敷」とあって、この時拝領したのは自邸ではなく登城にあたって装束を改めた装束屋敷だったことがわかる。京極家の屋敷を拝領したのは事実となったが、寛永十八年（一六四一）および、明暦三年（一六五七）という二度の大火を経た後の大名の江戸屋敷に、桃山時代の障壁画が残されていたとはとても考えにくい。寛永大火では九十七町が焼け、百二十三の大名屋敷が焼失したため大名火消しが設置されるきっかけとなった。明暦の大火はいわゆる「振袖火事」のことで、過去最大規模の火災だったことで知られている。

京極家の江戸屋敷から引き取ったことが怪しいとなると、同じ頃の寛文元年（一六六一）に亀ヶ崎城の本丸に新たに広間を建造しているので、その際に旧御殿の障壁画が鶴岡城に運ばれたということも考えたくなる。だが、小寺信正は享保年中（十八世紀初め）に『荘内物語』を著わした人物であり、京極家の屋敷を拝領した年代に近く信憑性は決して低くない。少なくとも他家の取り潰しにあたって金碧画を入手した、という内容に関してはまだ検討の余地がある。

『大泉紀年』に、寛永十年末に断絶した島根・松江藩主、堀尾山城守忠晴の御屋敷を拝領したことが寛永十一年（一六三四）にみえる。六月二十六日付け村井兵左衛門あて書状に「堀尾山城守殿御屋敷御拝領御移被遊候由目出度」とある。堀尾家の屋敷拝領は慶長六年（一六〇一）の大火以後、寛永十八年の大火以前のことで、「桐図」や「躑躅図」の年代とも矛盾はない。ちなみに断絶した堀尾家のあとに松江藩主となったのは小浜藩の京極忠高であった。忠高と絶家となった宮津藩の京極忠国の父、高広は従兄弟の関係にあたる。その忠高も寛永十四年（一六三七）に末期養子として甥、高和を立てたが認められず丸亀に改易となっている。どうやら小寺信正は京極高国の断絶と京極忠高の改易とを混同した節がある。

「竹林図」と「桐図」および「躑躅図」との画風の違いを説明しようとすると、「竹林図」については最上義光時代のものとし、「桐図」と「躑躅図」は断絶した堀尾家の江戸屋敷から引き取ったというように、別ルートによる伝来を想定しなくてはうまく説明できない。「竹林図」は今のところ最上時代の障壁画の可能性がある唯一の遺品と思われる。

時代が大きく変化するときには文化財や美術品が失われる。明治になって破壊された文化財は廃仏毀釈と廃城令によるものがとりわけ甚大である。明治六年の「廃城令」によって全国で百四十四の廃城（鶴岡・新庄・上山・米沢を含む）が決まり、黒崎研堂の『庄内日誌』の明治九年四月には「お城の取り壊し作業書くに忍びず」と記されている。山形城は存続とされたにもかかわらず、廃城になった城と同じ時期に払い下げられて破却されてしまった。家臣の松宮長乳の日記『老いの友』に酒井家は「（明治五年四月頃）御城内御道具御城外へ夫々御片付」とある。多くの襖絵の中でなぜ「竹林図」が残されたのだろうか。

『雞肋編』巻三十八の「年始御規式帳二」によれば、一月三日に大庄屋および鶴岡・酒田の町人年寄・御用聞町人らのお目見えの儀がなされるのが恒例だった。この日には桐の間と桜の間の間仕切りが取り払われ、桐の間の拭い縁に並んだ庄屋や町人らが松の間上段に出御した殿様に披露された。御殿に上がったときに真っ先に目に入る玄関に最も近い床の間の巨大な竹林図は、きっと彼らの目を驚かせたに違いない。その時の強い印象がこの図を在りし日の姿のままで残させたのだと思う。

（山形大学教授）

略歴

宮島新一（みやじま・しんいち）

一九四六年愛知県生まれ。文化庁、京都・奈良・東京・九州国立博物館などを経て、二〇〇七年から山形大学教員。研究分野は日本絵画史。

著書『武家の肖像画』至文堂
日本の美術シリーズ（一九九八）
共著『画壇統一に賭ける夢』文英堂（二〇〇一）
『戦国合戦絵屏風集成』（川中島合戦図・賤ヶ岳合戦図／長久手・長篠合戦図）中央公論社（一九八〇～八一）

保科正之公と浄光寺

石川藤男

はじめに

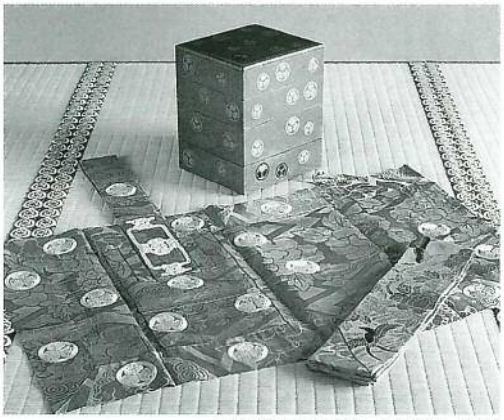
保科正之公は、現在復原中の霞城―山形城に七年間在城した。まだ新しい城郭であったろう。奥羽の押えとして寛永十三年（一六三六）七月に信州高遠城三万石から山形城二十万石で移封してきた。正之公二十六歳であった。寛永二十年（一六四三）七月に会津に移封していく。

一、山形浄光寺

日蓮宗本眷山浄光寺は市内八日町にある。この寺は山形城主保科正之公と縁の深い寺なのである。どんな関係なのか辿ってみたい。

この寺を尋ねると、壮大な寺地と山門、新築された本堂と庫裏。そして仏殿には開基の最上義光公と保科正之公の母「お静の方」の位牌が安置されている。また正之公より拝領したという袈裟と重箱が保存されている。

最上義光公は、父義守の病の平癒を願い祈祷し快癒した。その報恩として現在の寺地一万坪を与えられ、吉原の法喜庵より移ったという。



正之公より拝領した袈裟と重箱

正之公が山形城移封の前年にお静の方が逝去されていた。九月十七日である。高遠では日蓮宗長遠寺で盛大に葬儀が執り行われていた。諡名は「浄光院殿法紹日恵大姉」である。

正之公の山形城への御所替は七月廿一日で、入部は八月廿七日である。程なく法華宗普光山本眷寺を浄光寺と改め、お静の方の位牌所と定め、高遠より長遠寺住職の日遵上人を迎え第四世とした。のちの会津若松移封では、日遵上人二世の日陽上人を会津に迎え、広壮な浄光寺を創建し、百石を与えている。（「保科正之公と土津神社」）

二、浄光院七回忌のこと

山形浄光寺での法事を行った記録を見つけたので次に記す。

寛永十八年九月十七日
浄光院様七回御忌御法事、於浄光寺御執行
御布施御法事料として銀子拾五枚
米百俵被遣之
（中略）
且是迄御一周忌御三回忌等御法事可在之
処其次第留記無之　（「家世実記」）

一周忌、三回忌の御法事も行われたろうが、記録が無いので判らないという。

そもそも「家世実記」は、家老北原采女の発案で編集され、五年後の文化十二年（一八一五）に完成したもので、既に約一八〇年経過し、資料が散逸していたのだろう。

三、江と静

お静の方が子の誕生を願って、大宮の氷川神社に納めた祈願文がある。その中に「御台嫉妬深く」とか「営中に居れず」というのがある。正室江と側室お静の方の関係が窺われ、興味をそそられるところである。因に正之公の誕生は五月七日である。

敬申祈願之事　大宮宿
南無氷川大明神　当国の鎮守として
跡をこの国に垂れ給ひ　衆生あまねく助け
給ふ　ここにそれがし卑しき身として
大守の御思ひ者となり　御胤を宿して
当四五月の頃臨月なり　しかれども　御台
嫉妬の御心深く　営中に居る事を
得ず　今　信松禅尼のいたわりによって身を
このほとりに忍ぶ　神命男子にして
安産守護し給ひ　二人とも生を全うし
御運を開く事を得　大願成就なさしめ給はば
心願の事　必ず違ひ奉るまじく候なり
慶長十六年二月　志津
大守…将軍　御台…江　営中…江戸城内
見性院・信松院…武田信玄娘
（中村彰彦の文より）

おわりに

正之公の誕生・生育には、数多の逸話がある。のちに家臣として召し抱えられる竹村、神尾家は、誕生にかかわった恩人である。お静の方より正之公への伝言だろう。分限帳や山形城下絵図にも屋敷が載っている。

また東京目黒成就院に「お静地蔵」が現存し、今も人々の信仰を集めているという。

四代将軍家綱公の後見役や高遠・山形・会津藩主としての活躍は枚挙にいとまがない。

参考図書
「会津藩」「本眷山浄光寺少史」「高遠のあゆみ」「保科正之」ほか

（山形霞城郷土史研究会会長）

最上義光歷史館サポーター
義光会だより
No.1
2011年3月

題字　齋藤蕉石

最上義光歷史館ボランティア活動
出張こども講座「ヨシアキ☆すく～る!?」の取り組みを紹介します。

なぜ出張してまで子供達に講座をやろうとしたのか？

私達が、館内案内する入口のところに「最上義光」と書いた旗があります。「この字はなんと読みますか」と聞きますと、「もがみよしみつ」と読んでしまう人が多いのです。山形市民でも、どこかに「よしあき」と言う言葉は知っていても、漢字を見せると「よしあき」と読んでもらえないことがわかりました。

また、歷史館には小学校の生徒達が見学に来て、私達が案内をします。ある時、先生と対話することがありました。先生から「日本の歷史にでてくる信長・家康・秀吉などは生徒に話がしやすいが、小学校の副読本にでてくる、三島通庸や最上義光など郷土史的な人物は不得意で説明がしにくい。皆さんからこのようにして教えていただいて、また本物の鉄砲の玉が当たった兜を見せていただき、本当に有難いです。」と言われた言葉が印象に残りました。

これがヒントとなり、役員会で取り上げ歷史館側と協議をしながら、歷史館が企画する子供講座とタイアップして、一緒に実現しようとなったわけです。

そして、当初は歷史館に来た小学校の生徒に紙芝居のようにして説明しようとしたのですが、もっと積極的に一歩前に出て、パソコンとプロジェクターを持参して、こちらから学校へ出向いて行こうということになったのです。

この企画で最上義光をどのように描いていくのか？私たちは子供達に何を伝えていくべきなのか？プロジェクト会議で検討しました。その結果、現在の山形の町並みの基礎を築いた〝義光の業績と人物像〟を伝える事にまとまりました。

さっそくプロジェクトメンバーに役割・分担を決めて、最上義光の一生を年代ごとに集約して、その行なった主な業績をまとめることからはじめました。

一番気を使ったのは、文章を小学校四年生の目線に合わせて、いかにやさしくまとめるかでした。

義光は何回戦って何戦、何勝ですか？

義光が持ち上げた力石は何キロぐらい？

そしてプロジェクト会議を何回も重ねてやっと二月末に一応の完成のメドがつきました。プロジェクトのメンバーは各自仕事を分担しながら、家庭にもち帰って資料を作成し、それを繋ぎあわせては修正しそれの繰り返しです。うちの家内には「現役の頃、このように頑張って仕事していたらもっと偉くなってたろうになあ」と揶揄されたこともあります。プロジェクトのメンバーには頭のさがる想いであります。

子供たちの反応をみるために前から決めていたモデル校の第一小学校・第四小学校と打ち合せをして、お披露目をすることになりました。

発表している間も、大きな反応が見られました。特に「駒姫は十一才で関白秀次に認められて結婚を申し込まれました、ちょうど君たち位の頃ですよ」と話すと「ウワー考えられない!!」「早すぎる!!」などと聞こえてきました。反響はとても大きかったと思います。

また、あとから生徒たちが感想文を書いて送ってくれました。

・義光のころから七日町があり、一番にぎやかな町を作ったとは知らなかった。

・義光が自分のためでなく、みんなのためにお寺や神社をつくってくれた偉い人だとは知らなかった。

等自分なりの言葉で書いて送ってくれて、ホロッとするところもありました。最後に「第一小学校の校門のところが三の丸のお堀であったことや、学校の校章が〝おもだか〟で水野藩の家紋であったことなど子供たちばかりでなく、自分たちも勉強になりました」と先生の御礼の言葉もありました。「本当にありがたく、やりがいがあったな」とつくづく感じました。

来年度実施の子供講座に向けて努力していきたいと思います。

（義光会会長　阿部　久照）

この度、東日本大震災で災害に遭われた方々に心からお見舞い申しあげます。

会の活動募金から三万円を義援金として届けました。被災者のみなさん、悲しみを乗り越えて、新しい未来に一歩ずつ歩み〝心の春〟が早く訪れますように。

四期生の講習風景

平成22年度
事業活動報告

入館者総数　24,296人
（20年度　19,598人、21年度　52,684人）
○サポーター数　登録者42名
○実働日数　289日
○１年間の延べ出席者数　1,950名
○１日平均の出席者　6.7名（午前3.5名／午後3.2名）
○自主研修会　６回
○最上義光歷史館とのタイアップ事業
「こども講座　ヨシアキ☆すく～る!?」２校実施
第四小学校　２月９日
第一小学校　３月12日

編集後記

歷史館だよりに〝義光会〟の活動状況を紹介する貴重な頁をいただき大変うれしく思います。また、会員の励みになります。子供達の反応を見ながら試行錯誤して、次ぎえのステップにしたいと思っています。次回、御期待に添える様な御報告が出来れば幸わせです。

駒澤

○平成22年度 事業スナップ

○いざ出陣!!
義光会会長テレビ出演

○山形市姉妹都市オーストラリア・
スワンヒル市の交換留学生来館

○愛の武将隊の最上義光と
歴史館の最上義光(館長)

※最上義光歴史館の最新情報は
公式ホームページをご覧ください。
http://mogamiyoshiaki.jp

○遂に完成!!
最上義光甲冑ペーパークラフト

○名子教授の歴史講座「連歌史の中の義光」

○「山形おきたま愛の武将隊」来館

平成22年度事業

○企画展《4月1日－同月11日　前年度継続》
「市民の宝モノ2010」展

○常設展示Ⅰ《4月13日－7月11日》
「鐵[kurogane]の美2010」～武士「mononofu」と日本刀～

○特別公開「坂紀伊守像」《4月13日－5月16日》

○常設展示Ⅱ《7月13日－10月11日》
山形城御殿の杉板戸と「那須与一射扇図屏風(未完)」公開

○常設展示Ⅲ《10月13日－1月10日》
「最上家の手紙と戦国事情」

○企画展《1月12日－4月10日》
「市民の宝モノ2011」展

○歴史講座
サポーター養成講座「義光塾」
会場／最上義光歴史館　研修室

・8月23日「城絵図と最上城下－新出の城絵図から－」
講師／市村幸夫氏

・11月22日「白鳥氏と最上氏について」
講師／鈴木　勲氏

・1月15日「古代の出羽国」
講師／吉田　歓氏

※中止3月19日「山形の歴史を語る会」
講師／片桐繁雄氏

○歴史講座
郷土史講座「最上義光と文学」
会場／山形市中央公民館　研修室3

・2月19日「連歌史の中の義光」
講師／名子喜久雄氏

・2月26日「最上義光の文学①」
講師／片桐繁雄氏

※中止3月12日「最上義光の文学②」
講師／片桐繁雄氏

○こども講座
「ヨシアキ☆すく～る!?」―山形の殿様、義光公を知ろう!
講師　最上義光歴史館サポーターの会「義光会」

・2月9日　山形市立第四小学校　四年生

・3月2日　山形市立第一小学校　四年生

研究余滴⑪

地震と最上家

長谷勘三郎

二〇一一年三月十一日午後二時四十六分。

M九・〇という巨大地震が東北地方沖の太平洋で発生。直後、未曾有の大津波が東日本沿岸部に襲いかかった。

山形地方は震度五の強い揺れだったにもかかわらず、大災害とまではいかなかった。住民の一人としてこれは本当にありがたいことだった。

ここで、地震と最上家にかかわる記録を取り上げてみよう。

最上義光が伏見滞在中の慶長元年閏七月十二日（一五九六・九／五）の大地震のときの話がある。

前年の八月、豊臣秀次失脚事件にからんで、義光は娘駒姫（おいまの方）を惨殺され、みずからも秀次に加担した疑いで、秀吉から領国を没収されようとした。そのとき、家康のはからいで事なきを得、義光はこれに深く感謝し、事あらば家康の恩に報いる覚悟でいた。件の地震が発生したのが翌年である。次は『徳川実記／巻二十五』からの要旨。

「大地おびただしく震い、伏見の城ことごとく破れ崩る。在京中の大小名は秀吉のもとに馳せ付けたが、義光ひとりは家の子郎党らを引き具し、裸馬に鞭打って徳川家の御館に馳せ来たり、かかる時には人の心も計りがたし。私義光がおそばにこうしている限りは御心安くおぼしめさるべく候、とて御館を守った」

この話は、山路愛山が名著『徳川家康』に取りあげ、近年では京都大学の地震史学者も別の意味で着目しておられる。推定M七・五。

義光亡き後の慶長二十年六月一日（一六一五・六／二十六）、江戸大地震。M六・五ほど。次は『最上家譜』より。

「大家破れ倒れることおびただしく、江戸はことのほかの騒動になった。駿河にいた大御所様（家康）のところに誰も注進申し上げなかったが、最上家親はさっそく飛脚をもって状況を報じたので、たいそうお喜びなさった」

親子二代、地震に際しては家康のところに真っ先に駆けつけたわけである。

今回の巨大地震・津波は、貞観十一年五月二十六日（八六九・七／十三）の三陸大地震・大津波以来のものだと新聞などで報じられている。『三代実録』にあたってみると、天変地変ここに極まったという書きぶりだ。推定M八・三（理科年表第八十四冊）。

「陸奥の国、地大いに振動す。流光昼の如く、人民叫呼し、倒れ伏し、起き上がることもできなかった。……家屋は倒壊、人も馬牛も圧死。城館砦壘の崩れ落ちること数を知らず。…海の吠え狂い叫ぶ声は雷のよう。海面は高く盛り上がって忽ち国府に押し寄せ、数千百里が狂乱する怒濤に満たされ、その果ても知れぬ。原野も道路も滄溟となり…溺死者千人」。（原漢文を要約）

およそ一一五〇年前のこの異変も、目を覆わんばかりの大惨事だった。

このたびの大震災、まさに言語に絶する。亡くなった方々のご冥福と、被災地の一日も早い復興を心からお祈り申し上げる。

平成23年度事業

1．展示事業

(1)企画展

①「山形城発掘展（仮称）」（10月12日－1月9日）

山形城の発掘事業によって出土した資料などを展示公開します。

②「市民の宝モノ2012展（継続企画）」（1月－4月）

山形市民を対象に、所蔵する「宝モノ」を募集して展示し、広く一般に公開する市民参加型の展覧会です。

(2)常設展示

最上義光を中心とした最上家関係資料と山形城関係資料、山形に関わる文化財などを展示紹介しながら、テーマをきめて一部コーナー展示を行います。

①「鐵の美2011」～郷土の刀工たち～（4月12日－7月10日）

②「女性のお洒落と装い（仮称）」（7月12日－10月10日）

2．教育普及事業

(1)歴史講座

①「義光塾」

歴史館サポーターのスキルアップを目的とした勉強会です。

②「郷土史講座」

一般市民を対象に、最上義光や郷土史、文化財などについて学習します。

(2)こども講座「ヨシアキ☆すく～る!?」

山形市内の小学校に出向き、最上義光を中心に郷土の歴史や文化を学ぶ機会をつくり、郷土史に対する関心と理解を深め、愛郷心を育てる一助とします。

3．調査研究事業

(1)最上家関係資料・史跡調査（継続事業）

県内外に残る最上家等に関わる文書資料や文化財・史跡などの調査研究を進め、写真撮影等による記録保存及び目録作成、複写等の資料整備を行い、その成果を紹介します。

4．その他の事業

(1)ITに係わる企画と情報管理

歴史館のホームページを活用して様々な情報を発信するとともに、企画から物販まで幅広く事業を展開していきます。

(2)『館だより』の発行（年1回）

事業報告や考察、山形の歴史や最上家に関する情報を広く一般に提供します。

※詳細については最上義光歴史館にお問い合わせください。

表紙の資料

旧鶴岡城本丸御殿障壁画「竹林図」（写真は部分）

紙本著色／作者不明
桃山時代（一七世紀）
縦五四〇・〇×横一七〇・〇

本図は、約四〇〇年前に描かれた鶴岡城本丸御殿「竹の間」の障壁画です。所蔵する財団法人克念社がデジタル修復をして、描かれた当時の色鮮やかな色彩が再現されました。宮島教授は「これほど巨大な桃山時代の障壁画が現存していたとは驚きだ!!」とおっしゃっていました。最上氏関係の絵画資料の中でも第一級の資料といえるでしょう。

鶴岡城（鶴ヶ岡城）は、大宝寺氏（武藤氏）の居城であった大宝寺城を最上義光が慶長八年（一六〇三）に隠居城として整備し、吉祥の鶴亀にちなんで酒田の亀ヶ崎城とともに改名した城です。

※竹林図の詳細につきましては、2～4頁の宮島新一氏の論文をご覧ください。

ご利用について

開館時間　午前9時から午後4時30分
入館料　無料
休館日　月曜日（国民の祝日となる場合はその翌日）
　　12月29日から1月3日
交通　JR山形駅より徒歩約15分
　　大手町バス停留所より徒歩1分

来館案内図

平成23年3月発行
編集・発行　財団法人山形市文化振興事業団
最上義光歴史館
〒990－0046
山形市大手町1－53
☎023－625－7101
FAX023－625－7102
http://mogamiyoshiaki.jp
印刷　株式会社大風印刷